要旨

異文化交流：デンマークと日本における書道と抽象芸術
ゴンヒル・ボーウグレーン（コペンハーゲン大学美術史・視覚文化学科准教授）

デンマークの芸術家・理論家アスカ・ヨーン（1914-1973）と日本の書家・理論家森田子龍（1912-1998）の交流について考察する。アスカ・ヨーンはヨーロッパの前衛芸術家グループ「コブラ」の創設者の一人であり、森田子龍は日本の前衛書道グループ「墨人会」の創設メンバーであった。この2人は、1950年代における前衛書道と抽象芸術の世界的なつながりを代表するアーティストであり、この時代には世界中のアーティストが、国や美学、コンセプトの境界を越えたコミュニケーションを模索していた。森田とヨーンの往復書簡は、2人のアーティストが文化的なネットワークを超えて熱心に活動していたことを物語っている。

近年、日本の前衛書道とアメリカの抽象表現主義やヨーロッパのアート・アンフォルメルとの関係については多くの研究がなされているが、モダニズム美術におけるデンマークと日本のアーティストたちの芸術的コラボレーションについてはほとんど、あるいはまったく注目されてこなかった。デンマークと日本の個々のアーティストやグループは、特定の国家の国民であることと、美的感覚や芸術的実践を行う創造的な人間であること、という矛盾した枠組みの中で、自分たちの文化的アイデンティティを交感しあい、国や民族の境界を越えた連携を形成していた。

トランスカルチュラル・アプローチは、非対称的な力関係の上に成り立つ西洋と非西洋という従来の二分法を解体することを目的としている。本発表では、アーカイヴや一次資料にトランスカルチュラル・アプローチを適用すると同時に、アスカ・ヨーンや森田子龍自身が、戦後、グローバルな人間性を再構築する手段として、非具象的な芸術を構想する方法において、トランスカルチュラルな立場をとっていたことを論じる。

**
ゴンヒル・ボーウグレーン：
コペンハーゲン大学美術史・視覚文化学科准教授。トランスカルチュラル・モダニズム研究プロジェクトの主任研究員。ノボ・ノルディスク美術史研究財団の助成による研究プロジェクト「トランスカルチュラル・モダニズム：デンマークと日本の芸術交流、1945-1970」の主任研究員。現代日本の視覚芸術に関する多くの学術論文やアンソロジーを発表する一方、デンマークと日本の異文化間のつながりを歴史的観点から研究している。単著『*Begærets billeder*：*Visuel kultur i japanske træsnit* (Images of desire: Visual culture in Japanese woodblock prints, 2024)は、デンマーク・デザイン・ミュージアムの日本版画コレクションに焦点を当てている。